悲考說の記

027
419
1

蓬出

蘭古刊

027
419
1

愛知女専
蔵書
11788
図書

一三74

麦荒といへる滝の図とて人の寫しえさせしといふをおのれ
としころみたりしと思ふ所なれはさらハその瀑布をたつねゆかむ
といへていほぬしの入道も同しこゝろなりとてともにいてたつ
和泉舟やとひて水うみの浅き桜をへて法道をゆくほとに智ゐの
のうちやれもこゝろのおもむきに長のゑていつくゝといひて志かのしと
いふ香をも思しこゝろちとも拝くらみの国を今くハ不破の
関まて荒らし後れ秋の風をきて寝との里なくハ結ひし秋の
草をふみわけて言ふ田とふ里にやとれあくる朝その瀑布あるよし

山ぞひのみち九曲道の間て小松生ひたる笠ゐをたとりてまゐる
さゝ紀谷川をこえてのほりしなへ人山の尾をのいふところに
やかて滝のもとに来つるいかなる瀑布なるらんと
いふに外なるおもしろき深山のかなる谷にて木
茂りて九曲をいへハ串の割をわれて人のかを
あはれなるものなれは滝ハかけれハ未たくらく入ぬれはあはれ
またかの滝つ日のあたりむかへるに日気さしてそのあたり
乃木の葉ふく草木をも照らすや滝の水くもの中にふりかくる

ありてうたゝし　滝のこゑは定めなきさ　其所乃流を
うけ汲みて老の一ちゝの薬なるは　日もあやしき　なりける
ものしからは　わかおや病し　今は其孝子なれや
大むかし　元正天皇とや申せし　御門御幸なりて此泉を
この泉にて御面を洗はせ給ひて　なめらかにならせ給ひ
もしましては　人の白き髪黒くなりかへり　あかし　目
あかくはたなれもろしの病いえぬれて　千代の寿をぞ
養老とあらためさせ給ひし　と年号もかへられ　滝の名なれの

いさゝかなりとも昔を思ひあはせて　おのづから歌ものせは　うちささげける

養老や歯のなき我も水むすふ

衿かへし老の目にふる菊の花　鬼風

滝は滝もたゆむ音なし秋の色　其山

うつの山ゆく山人此老をのいと軽うするを薬なりとそ　いふなる

尾花の穂に出ねよ滝の菓代なし　仮庵

養老寺にて　此所にうつせしの千羊あり　信む人
とてはあ床なし　今は其流れとおぼしくなるなれと

居てそのほとりに小松の樓たてて筵を入てもちうゐ姫
ハ三尺ばかり植込きけて衣をぬ九ぬ情し所うゑに花
人のをきまれ おなじゆらをうきたるよ立れ中よ
ほのゝ赤の枝二つゝゆよりてうたこの風の
を蓮水とつゝ葉のいて湯なりとちうきうろうゐん
出さきの水を湯よりして湯あつせきほ湯舟と
ゆあきをゑ人のやうつよ家し弟つ〜ゆたうきうに奥
乃ろうゐ代家のきつくきをくよみ中れ松風まあれ
うきうはきやうのやうに女のうちきをきうきなうあうきく
樣ふりわてつゝ紋つき禁の花卿のをうきに思ほうきれ
あゆきに小里れ無きをあとつふう紙ハ近江のをのこれき
うしをうきてきをうきの手ほあうきのうらうれをなきもう
あきあのしなつよりつ白髮のまう清うはかうしとう
ゑ〜ぬうきうきの中きてもあきれしきてもきのよ
末一道を垂井の泉をもうきて実里先生れかく
きを家をもうきの門きをして札をうけうう 盜人多は入れ

無用の書物夜具鍋釜から錢迄一切賣はらひしとあつこの
先生ハたゞしの道越りなれてよ係情をもておさめすふるくうるみて
おのれを去りて二なき遊びつくる花なる我あいてもおしく
通りしを今は世をはなれし深の林康此里まておひ来る縁ふかき乃め
やうにのうつりけるさいさゝもにするまいさなるまもとわすれ
此頃の人ハ学の事おはのうつりてハ數の休わんとする
しかうしてうらわおきさく一朶のうへゆくおのれい
書升にやはふるの老ハ杜柳なとふかきまもの先生此

おのれしら案内して松きよみの浜ミの社より弥の代み
喪ふ営んにの云ひてまゐらの原に道坂の西うん此寺
墓に朝長の志ゝし此塚越し笠法此里よいふる乃
里ハおわとあ旅着の記に書し所こそ錢るて赤坂の
うたゞまさつまて升中氏の許に旅にゆくされともてなし
のあまりかくつよくれハ毛等川の邊のほとりさもいさ
猿つとあらし此ハ志あてきさに来てむくつ子里乃
ほとりふるに道に松本におする河いこつてなうわ系黄川

なるこうハさるたのかえあるを岐阜は市より入りて
仮よりさ宿をもとえそのふたりしろのはをさ出て
事ハあるまいしるまして九月二日はたれもう
さ是もうるあるはうく出もそうそてはつるき
うろ日ひなるて川の面ひろるを西方もわるそれと
むろさて勢田はるうはうるそ水面おるその岸は
ほるて毎をつなうをあれまはて川の上は方を守わ
みるをやいわて自れらの塔を日ひ出すんやうに

あるうはたるうちに火気のふるちをるうはを
七艘の船毎のはは毎をとはしれ来れるわ
第七しそ微おちるふ船の箱　そ白
ちの九なるうにたるをなるひるるあはさ毎を箱
箱さ出しまかるを火を焼るしその気をうたわ
水まるやりてはの漂の毎の根菩の猫のそるをくまて
いるのたてぬその気を船侍るみ人をからは布もて
つるを猫りて義なるひう左のを十二節の船

縄をもち方のようして船のうへ水の面をうかゝ
へゆくに手ごろにてその縄をみぎてにもちうゑ
あげ
戸へ入るとその縄をなゝめ九れ魚をとゞめて居るを
手縄をうかゝなしと船をあらたいよて肩
をゝしいを吐てゝく船をゆる放るそのひらゝ
海の義をうちゆるゝ火をの水のとゝ義て義をいゝ
ものゝ水の面ゞ　ふゝとしそのゆゝ乳ふゝめて　十二月
乃船ゝ此乳ゝ吐もゝゝわくゝ方いゝ

六一

毎ゝゝゝ向ゝ船のかゝ一面

夏ゝ夕ゝゝゝしゝは記ゝゝ八ゝゝゝゝに於ゝゝて
ゝのゝゝゝ此の水乳ゝゝかひ有　業戸
毎のゝりゝゝて指ゝゝもの二人つゝわゝて家ゝゝ、
ゝゝゝゝていを、おゝゝゝゝかゝゝゝゝもあゝあゝに無八
矢ゝいゝゝゝとはゝゝに川ゝへゝゝてゝけゝゝわゝゝゝ
水乳も入ゝゝなゝわゝてゝゝて口ゝのゝゝなゝわし
ゝの此ゝゝて手ゝゝゝゝゝゝれゝのゝゝゝゝゝゝて

休出し名ある秋の夜川とはなまへり名經
もみはの川らちるすゝき中九　記の実
さまはぬめるにう流りのそれる我その字の休け
とも就しまひて此志ろうそ手てかたし左給
舟路ハ字うし　売へちも失之ゆめその所の　はハ
河をこして称まゐの佗へ名長等の里まりて
見ゆる杖への舟をもハ门此おりよ流ふるよまてり
朝宮や称ふ雖まの言は　宗の折　甘白

鵜匠はうしこの家ましし入てあかきとなりに
称鵜ほちう垣の志流くや　ふ木槿
その花は流して指し手あり指さく字の人の時
まあひて宮仕俸禄おもかまくみ奉りをきまもうる我
さへ様ともつ日業として字まれをむのいよねるこ　ちうへハ
佛をとき休之錢錢轉てもくるま我見うに生身
をやしなはんとてうまれき殺生の業をなする
のあはれみに伝へしと見えなうにつきあくし　あるし

の老人よあらて物ていふとのうをしる給ふ白き
かしらをちりてをうるはよかるはもうはく
くほの雲のなかをとをなをてあをまをう使なを
給ふとをしをてをのわう國のはし給をわ給ふ
をふ世ありもろをしの書をし世をを世をを國をた
ををなを事ゆををしををれハゆをあをふ事な
給わをしを古を和歌を数ををれを事を拾
のにしの東のを給ふわをてはをの供ひをなへ

八

ををし事あをを我いつの世をわうをのををを
てをれををはをの國れ世をのあをなをてハかふと
なををををををれをてををあをををををのなをを
ををれ社をををれをををををををを給をを
給ををををもをの赤切れをををををを秋乃國
をををにふをいををうをを雲ををれををあをしれををを
旅をををものをををををををを世海あをを給を
なをををををををれハ京ゆををををしをををかを

宿のくれぬ[illegible]

[illegible]はすの白れ[illegible]ぬ　螺美

[illegible]　宗戸

貢[illegible]駒の白毛に衣[illegible]て　美

[illegible]　美

川・白い放下の[illegible]　戸

むさ[illegible]　白

[illegible]　美

[illegible]れて　戸

[illegible]　美

つけの小[illegible]の[illegible]　美

板の[illegible]　戸

[illegible]　白

ひろ[illegible]　美

さいしものを[illegible]　戸

白
戸
美
白
戸
丶
美

白
戸
美
白
戸
美
白
戸

[illegible]

十代つゝくらゐ山伏

[illegible]

めなれ　なる姫　町乃入口　[illegible]

[illegible]　白

[illegible]　戸

[illegible]九月[illegible]の[illegible]

[illegible]

山[illegible]

[illegible]乃中[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]戸

第六

浪華治平